

# 綾町の景観形成と照葉樹林

南九州大学環境造園学部 北川義男

はじめに

綾町の景観形成に係わった1)小丸川幹線新設工事に伴う自然環境調査(景観含む)と2)綾町景観形成計画を通して、「綾町の景観形成と照葉樹林」について述べます。

小丸川幹線新設工事に伴う自然環境調査について  
1)目的:九州電力株式会社が今後の電力需要に対応するために、特別高圧線送電線「50万ボルト小丸川幹線新設工事計画として、事前調査などを通じ環境に配慮したルート計画を行った。この事業は送電線建設事業であるため、平成11年6月に施行された環境影響評価法では対象事業には該当しないものの、地域の理解を高めるために、その計画の実施にあたって、懸念されている自然環境への影響について調査を実施した。

2)調査項目は、現況調査として、事業計画の概要、地域の現況、自然環境の現況(水象、地象、動物、植物、景観など)、特に配慮すべき地域(綾の照葉樹林)で、それに基づき影響の予測・評価・対策をし、総合評価を行っている。実施期間は平成12年8月~平成13年7月である。

3)小丸川幹線新設工事の計画ルートは約46km、鉄塔101基であり、7市町(木城町、西都市、国富町、綾町、野尻町、高岡町、高城町)に位置する。綾町内の計画ルートは約8km、鉄塔16基である(右図参照)。九州電力㈱の「高圧鉄塔建設計画に伴う環境アセスメント」に対する景観部門のアドバイザーとして綾町から依頼され係わる。



4)送電線建設による景観面への影響調査の流れは、現況調査として、視点場の選定、現況調査・写真撮影、景観の評価(現況)、モニタージュ写真作成、影響予測のためのチェックとして、ルート選定にお

ける景観への配慮状況のチェック、ルート全体の見え方チェック、鉄塔の見え方チェックをし、影響の予測・評価をし、そして今後の対策の可能性のチェックを行い、保全対策の立案をする。

5)綾町においては、送電線建設反対活動が起こったが、議会で建設が承認された。

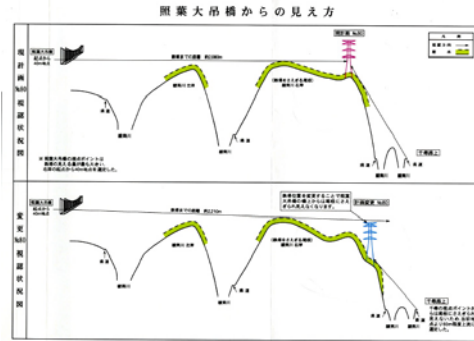


図:照葉大吊り橋の眺望から鉄塔が見えないように移動

綾町景観形成計画について

1)目的:綾町は平成19年4月景観行政団体(県内4番目)となり、豊かな自然景観と共生し、町民の生活に根ざしたまち景観を実現するために、景観法に基づいた景観計画区域を設定し、その区域に良好な景観形成を図るため基本方針や行為の制限を定めることを目的とし、景観形成計画を作成する。

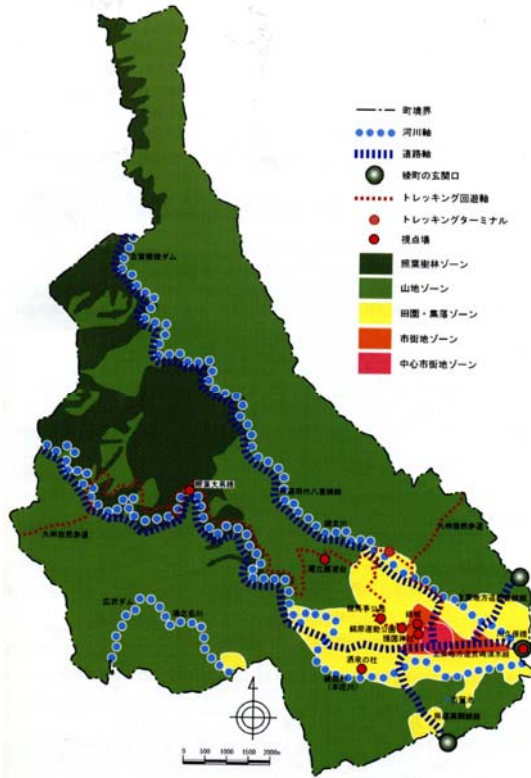
2)活動は、綾町が12名の綾町まちづくり景観委員会を設置し、「景観形成計画策定業務委託」を株式会社パスコと契約し、第1段階として作成した。

3)内容:景観法で定められた景観計画の対象となる景観計画区域を綾町全域と設定する。景観計画区域を山間部照葉の森地区、田園地区、まちなか地区に区分し、景観形成方針を設定している。景観形成方針は、ゾーン系、軸系、視点場に分け行っている。ゾーンとしては、山間部照葉の森地区を照葉樹林と山地に分け、まちなか地区を中心市街地、市街地に分け、田園集落地区とあわせて5つに区分し、方針を設定している。軸系では道路と河川にわけ設定している。その景観類型による景観形成方針を展開する位置は図示の通りである。

4)平成19年度5月に実施した景観についてのアンケートによる住民意向調査結果を一部紹介する。調査は1000部配布し、回収数は407であった。回答者の8割を越える人が綾町の景観に対して、「良い」、「まあ良い」と評価している。照葉大吊橋周辺の景観や橋からの眺望、まちを取りまく山並み景観などは

評価が高く、中心部のまちなみ景観や公共施設周辺の景観などで評価が低くなっている。今後の景観づくりに必要な施策として、まちの中心部を魅力的にするため、歩行者空間の整備や商店街の活性化や町民に対するPRや住民参画の必要性が述べられている。

◆景観形成方針図



・綾町の景観形成と照葉樹林について

- 1：景観は社会の表情である。そのため、対象地の「まちづくりや地域づくりのコンセプト」と結びつけた展開が必要である。
- 2：近代の都市づくりは経済性や効率性を重要視したため、都市部においては人口密度を高め、大地密度を下げるまちづくりが行われてきた。そのため、自然の後退やヒートアイランド現象や潤いの乏しい都市風景を創り出してきた。地球スケールでの温暖化問題も同じ発想の延長線上にある。
- 3：これからのまち（都市）づくりは、今までのパラダイム（考え方の規範・基準・標準のこと）では限界があると考えられる。新しい時代にふさわしいパラダイムとそれから導かれる実践のための解決策が危急の課題である。景観形成も視覚的処理手法としてとらえるのではなく、地域やまちが安定・充実するコンセプトと構築法を連続させ築くことが重要である。
- 4：日本においては、多くのまちが財政危機状況にある。生活の基本単位である家庭は本能的に大切にする

が、これからはそれに加え、自分たちが生活する「まち」も大切な基本単位とする発想を育成することが大切と考える。他に、持続可能な（循環型）社会、自立、総合的な視点とその調和、共生、住民参画（主体）がポイントとなる。

5：綾町は、郷田前町長のまちづくりのコンセプトを前田町長が引き継ぎ、より具体化・充実し連続的に構築されてきた。現在のまちづくりの考え（第5次総合長期計画）は、綾町の将来像を『「自然と共に生き、人と共に生きるまち、綾」～農村文化に育まれてきた共生と循環の思想を基調として、人々が誇りと希望を持って歩む地域社会を目指す～』とある。綾町の自然などの地域資源を活かし、人を育て、そして、交流機会（経済交流、都市間交流、国際交流、ふるさと交流）を高め、綾町物産の販路拡大、新産業の育成、手作り工芸の振興、滞在型産業観光の振興、商業の活性化を図る。そして、交流滞在人口の拡大も図っていく考えである。

6：綾町は「大地の恵み」を活かし、共生と循環の思想を軸として、総合的な展開が行われている。公民館活動も活発で住民参画も取り組まれている。また、綾町は地勢的な特徴を持つ。全体の約8割(7,572ha)を森林が占め、耕地が7.8%(741ha)、都市計画区域は8.8%(843ha)である。照葉樹林ゾーンは、綾北川と綾南川(本庄川)に挟まれ、南東部に位置する都市計画区域と対称に北西部に位置する。都市計画区域はグリーン(山林)に囲まれ、空間的まとまり性が高い構成にあり、その両サイドを綾北川と綾南川がながれる。隣接する国富町との景観の関係は、クローズ型の空間構成であるためゲート的な機能を提供している。総合的にとらえると綾町はアイデンティティー(個性)を築きやすい空間構成を持つ。これからの綾町は「新しいまちづくりの重要なモデル」の一つの拠点となると考える。

7：宮崎県景観形成の施策体系で提示されている将来像「自然と人々の生活が融合した“美しいみやざき”の創造」は綾町の方角と融合する。

8：照葉樹林に光を当てたコンセプトが、現在、世界遺産を目指す活動にまで成長している。照葉樹林はまちの将来像である「自然と共に生き・・・」のシンボルであり、また、宮崎県、九州、日本、アジア、世界を対象とする自然遺産でもある。これからのまちづくりから捉えた場合、交流滞在人口を高めることは重要で、その意味でも「照葉樹林」は幸運な財産だ。綾町の景観まちづくり活動は、住民参画型であることが「自然と、人と共に生きるまち、綾」に直結すると考える。

参考文献：小丸川幹線新設工事に伴う自然環境調査報告書

平成13年9月 九州電力㈱

綾町景観形成計画 平成19年9月 宮崎県綾町